

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第262集

# 箱崎遺跡2

—箱崎遺跡群第3次調査の報告—

1991

福岡市教育委員会

# 箱崎遺跡2

—箱崎遺跡群第3次調査の報告—



遺跡調査番号 8967

遺跡略号 HKZ 3

1991

福岡市教育委員会

## 序

箱崎地区は、博多とともに中世には対外交渉の窓口として日本の歴史の上で特異な発展を遂げてきました。付近一帯は筥崎宮を中心に歴史的遺産が広く包蔵されている地域です。これまでの調査によって、貿易陶磁をはじめとする多様な出土遺物がそれを物語っています。

近年、市営地下鉄の開業以来、筥崎宮門前の街並の再開発事業が活発化し、高層ビルの建設が増加しています。

このたび、民間のマンション建設に先立って箱崎遺跡の一部を調査しました。調査の結果、中世から近世にかけての遺構・遺物が発見されました。

本書は、これらの発掘調査の成果を収録したものです。本書が、埋蔵文化財に対する市民の方々のご理解、さらには学術研究上役立つことができれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査から整理報告に至るまで株式会社カイシン興業、株式会社富栄建設をはじめ、多くの方々のご理解とご協力を賜わりましたことに対し、心より感謝の意を表する次第です。

平成3年1月10日

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

## 例　　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が1990年（平成2）年1月9日から2月21日にかけて発掘調査を実施した、共同住宅建設に伴う箱崎遺跡群の第3次緊急発掘調査の報告書である。
2. 遺構の呼称は記号化し、井戸址→S E、土壙→S K、溝→S D、ピット→S Pとした。なお、遺構番号は種類に関係なく連番とした。ただし、S PはS Pだけで番号を付している。
3. 本書に使用した遺構図及び現場写真は上方高弘が中心になって行なった。遺物実測は下村 智と上方高弘が行なった。また、製図は下村の他、竹原りえ、吉村知子があたった。遺物写真は上方高弘の撮影による。
4. 本書で用いる遺構図の方位は全て磁北である。
5. 箱崎遺跡群第3次調査に係る遺物、記録類（図面、写真、スライドなど）は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理される予定である。
6. 本書の執筆・編集は下村が行なった。

遺跡調査番号	8967	遺跡略号	H K Z		
調査地 地籍	東区箱崎一丁目2731番1,4			分布地図番号	034-A-1
開発面積	361m <sup>2</sup>	調査対象面積	180m <sup>2</sup>	調査実施面積	157m <sup>2</sup>
調査期間	1990(平成2)年1月9日～2月21日	事前審査番号	1-2-119		

# 本文目次

## 序

Iはじめに .....	1
1 調査に至る経過と調査組織 .....	1
2 遺跡の立地と環境 .....	1
II調査の記録 .....	3
1 井戸址 .....	3
2 土壌 .....	14
3 溝・柱穴など .....	29
IIIおわりに .....	30

## 挿 図 目 次

Fig. 1 箱崎遺跡群位置図 (1/25,000)	2
Fig. 2 調査区位置図 (1/4,000)	2
Fig. 3 調査範囲図 (1/300)	3
Fig. 4 SE09実測図 (1/40)	4
Fig. 5 遺構配置図 (1/100)	折込
Fig. 6 SE09出土遺物実測図(1) (1/3)	5
Fig. 7 SE09出土遺物実測図(2) (1/4)	6
Fig. 8 SE09出土遺物実測図(3) (1/2)	7
Fig. 9 SE22実測図 (1/40)	8
Fig.10 SE22出土遺物実測図(1) (1/3)	9
Fig.11 SE22出土遺物実測図(2) (1/2,1/3)	10
Fig.12 SE24実測図 (1/40)	11
Fig.13 SE27実測図 (1/40)	12
Fig.14 SE24・27出土遺物実測図 (1/2,1/3)	13
Fig.15 SK02~04・13~17上塙実測図 (1/40)	15
Fig.16 SK01・03・04・06・07出土遺物実測図 (1/3)	16
Fig.17 SK10土壤実測図 (1/40)	16
Fig.18 SK10出土遺物実測図(1) (1/3)	17
Fig.19 SK10出土遺物実測図(2) (1/2)	17
Fig.20 SK12・13出土遺物実測図 (1/3)	18
Fig.21 SK25土壤実測図 (1/40)	20
Fig.22 SK20・26・32・33・36土壤実測図 (1/40)	21
Fig.23 SK18~29出土遺物実測図 (1/2,1/3)	22
Fig.24 SK25出土遺物実測図 (1/2,1/3)	23
Fig.25 SK30~36出土遺物実測図 (1/2,1/3)	24
Fig.26 溝・柱穴出土遺物実測図 (1/2,1/3)	26
Fig.27 包含層出土遺物実測図 (1/2,1/3)	27
Fig.28 確認面他出土遺物実測図 (1/3)	28

## 図版目次

- PL. 1 調査区全景（東から）
- PL. 2 (1) 箱崎の街並と筑崎宮（北から）  
(2) S E 09出土状況（西から）
- PL. 3 (1) S E 22出土状況（西から）  
(2) S E 24出土状況（南から）
- PL. 4 (1) S E 27出土状況（西から）  
(2) S E 27井筒出土状況（西から）
- PL. 5 (1) S K 10出土状況（西から）  
(2) S K 17出土状況（東から）
- PL. 6 (1) S K 25出土状況（北から）  
(2) S K 26出土状況（南から）
- PL. 7 出土遺物(1)
- PL. 8 出土遺物(2)
- PL. 9 出土遺物(3)
- PL. 10 出土遺物(4)
- PL. 11 出土遺物(5)
- PL. 12 出土遺物(6)

# I はじめに

## 1 調査に至る経過と調査組織

1989（平成元）年7月14日付で、榎崎義夫氏から東区箱崎一丁目2731-1及び2731-4地内における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査願が教育委員会埋蔵文化財課に提出された。申請地は箱崎遺跡群の範囲内にあり、芦崎宮の北100mに位置していること、また、これまで地下鉄路線内の調査（箱崎・馬出工区、昭和58年度）や福岡県柏屋総合庁舎建設に伴う調査（昭和61年度）によって、10世紀後半から15世紀にかけての遺構・遺物が検出されていることなどから、事前に遺構の有無確認が必要であると判断した。試掘調査は、同年10月12日に実施し、地表下-1~1.2mで12~13世紀を中心とする遺構・遺物を全面にわたって検出した。そこで試掘結果をもとに関係者と協議をかさね、工事によって破壊される遺構について、株式会社カイシン興業の受託調査として記録保存のための本調査を実施することになった。

調査組織は、以下のとおりである。

調査委託：株式会社カイシン興業

調査主体：福岡市教育委員会

調査統括：埋蔵文化財課長 柳田純孝 埋蔵文化財第2係長 柳沢一男

調査庶務：埋蔵文化財第1係長 飛高憲雄 松延好文

調査担当：吉留秀敏（試掘調査） 埋蔵文化財第1係 下村 智

調査補助：上方高弘

調査作業：石松 晋、鶴川 整、高田 茂、仲田忠孝、江崎光子、川上すぎえ、菅野シゲ、西野悦子、二本柳香代子、松井良子、長浦美美子、吉住クニ子

整理作業：上方高弘、安野 良、松尾絹世、竹原りえ、古村知子

## 2 遺跡の立地と環境

福岡市教育委員会が1981（昭和56）年度に発行した「福岡市文化財分布地図（東部Ⅰ）」には、箱崎遺跡群の範囲は示されていなかったが、芦崎八幡宮から青磁や白磁などの陶磁器片が採集されたり、古砂丘上に立地するなど芦崎宮を中心とした一帯には古代～中世の遺跡の存在が十分予測されていた。地下鉄工事に伴う調査や柏屋総合庁舎建設の事前調査で遺跡の一部が明らかになり、博多湾岸に発達した千代の松原から箱崎松原まで南北に伸びる古砂丘上に遺跡が分布していると考えられる。標高は4.0m前後で、西は博多湾に臨み、東は多々良川支流の須恵川、宇美川で境されている。

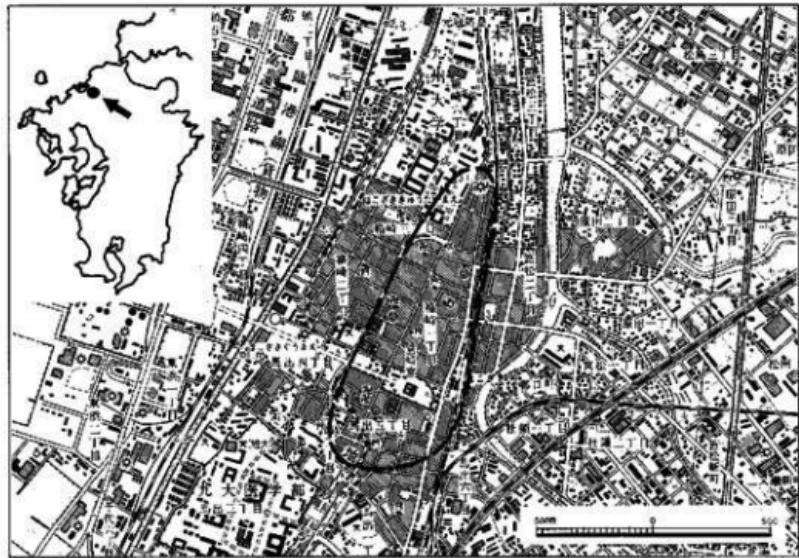


Fig. 1 箱崎遺跡群位置図 (1/25,000)



Fig. 2 調査区位置図 (1/4,000)

## II 調査の記録

### 概要

調査地点は、箱崎遺跡群のほぼ中央部に位置し、標高3.8m前後である。地表下1~1.2mで黄褐色砂層に達し遺構が確認できる。調査は、対象面積が狭いため土留工事、杭打ち終了後から開始した。搅乱層及び近世の包含層は重機で除去した。検出した遺構は井戸址4基、上塙32基、溝1条、ピット67個（遺物が出土したもの）である。土層は、地表下30cmまでが現代の整地層で、それ以下30cmが黒褐色土になっている。黒褐色土の下部には黄色砂層が薄く広がり、その下は層厚60cmの黒色砂質土である。これまでが近世の包含層である。近世の包含層の下は黄褐色砂層が現われ、中世の遺物を包含したり、遺構が掘り込まれたりしている。黄褐色砂層を掘り下げるかと黄白色の砂層となり、遺跡の立地する占砂丘の堆積砂となる。この基盤の黄白色砂層は東側から西側に向ってやや傾斜し、検出された遺構の高さも東側が高く西側が低くなっている。以下、検出された各遺構・遺物について概述したい。

### 1 井戸址

S E 09 (Fig. 4 ~ 8, PL. 2 · 7) 調査区中央部西寄りで出土した石組の井戸である。掘方の一部は基礎杭によって破壊されているが、長径3.3m、短径2.2mを測りやや橢円形を呈する。断面は緩やかに窄まりながら底に至る。石組は中央部に設け、30~50cmの大振りの石を花弁状に組み合わせる。周りには拳大から人頭大の礫を裏込めとして径2mの範囲内に密に詰め込んでいる。井筒は径60cm強の樋を使用し、井戸底に幅10cmの板枠が辛うじて残存していた。石組の井戸は箱崎遺跡では類例

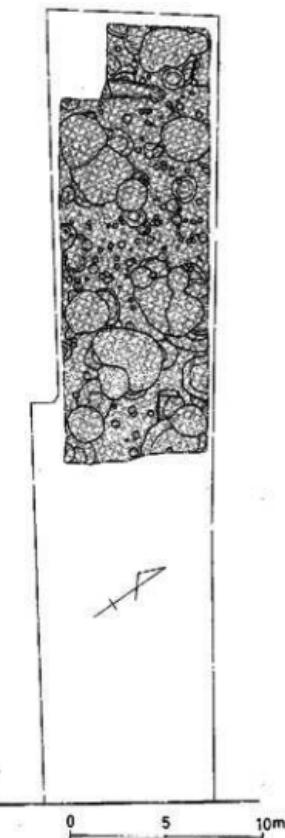


Fig. 3 調査範囲図 (1/300)

が少なく、第2次調査（柏屋総合庁舎）の9号井戸があるくらいである。箱崎遺跡と関係の深い博多遺跡群でも石組井戸はごく少数である。

遺物は井筒や掘方から、輸入陶磁器や国産の陶器、土師器、瓦質土器などが出土している。

Fig. 6-1 は輪高台を持つ白磁皿である。口径11.1cm、底径4.8cm、器高3.2cmを測る。口縁部は外反し、高台付近まで釉がかかる。2・3は青磁碗で、2は口径17.8cmに復元できる。同安窯系で内外面に描文がみられる。12世紀後半代。3は龍泉窯系の碗底部である。厚手の作りで緑がかった厚い釉がかかる。

15世紀に属するものであろう。

4・5は15世紀代の湯釜である。

4は口径14cm、

5は16cmを測る。

5の外面は平滑に仕上げられ、

肩部に菊花の連続スタンプ文が施される。6は

時期的に古い東播系の捏鉢である。復元口径は

23cmである。11

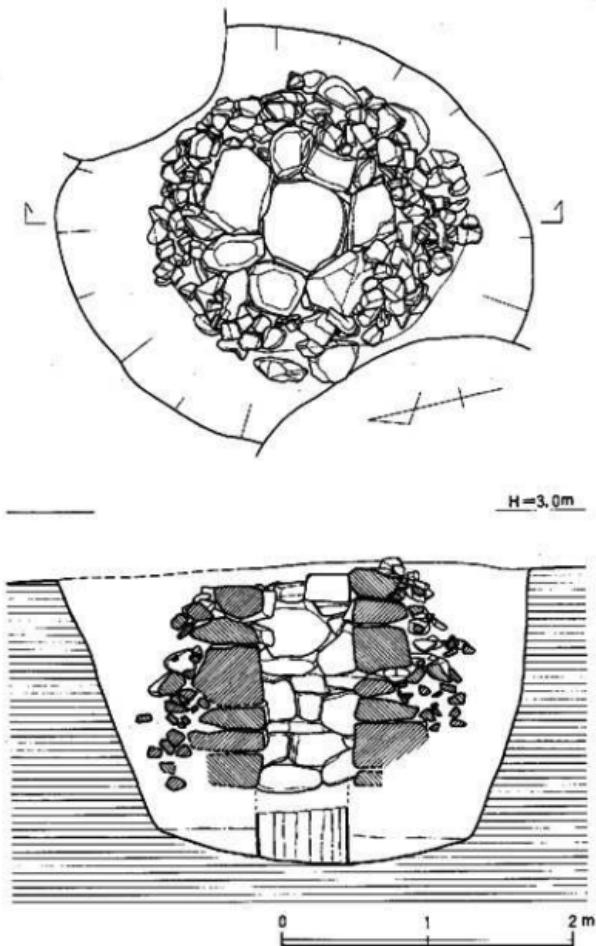


Fig. 4 SE09実測図 (1/40)

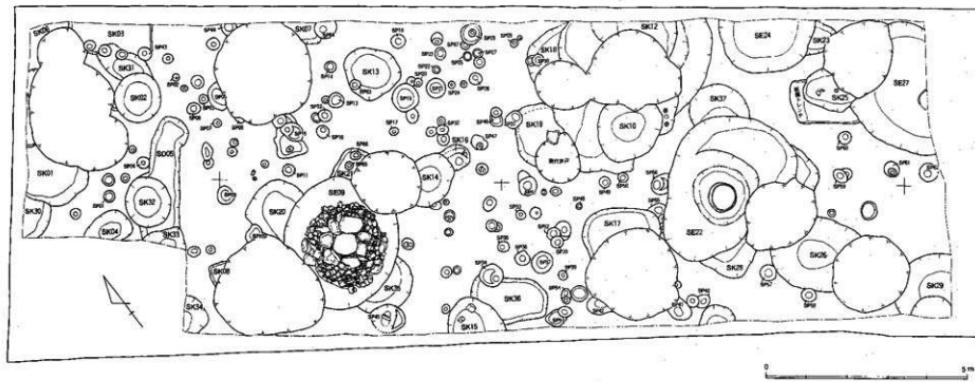


Fig. 5 造構配図 (1/100)

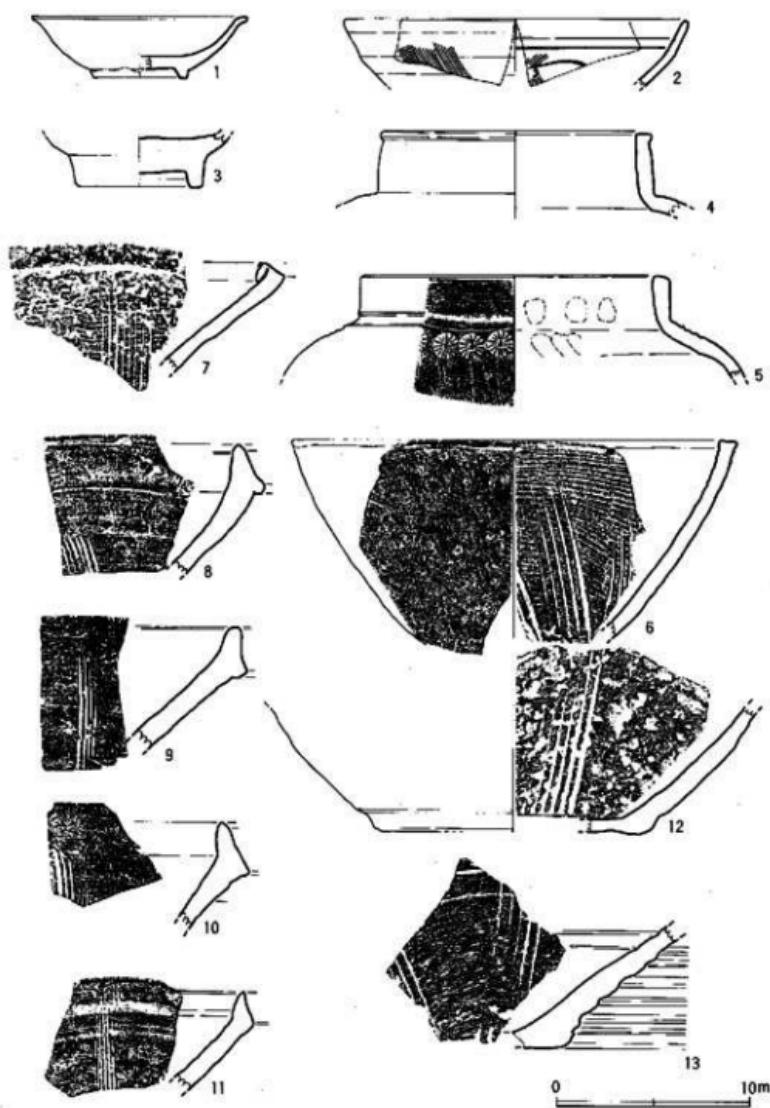


Fig. 6 SE09出土遺物実測図(1) (1/3)

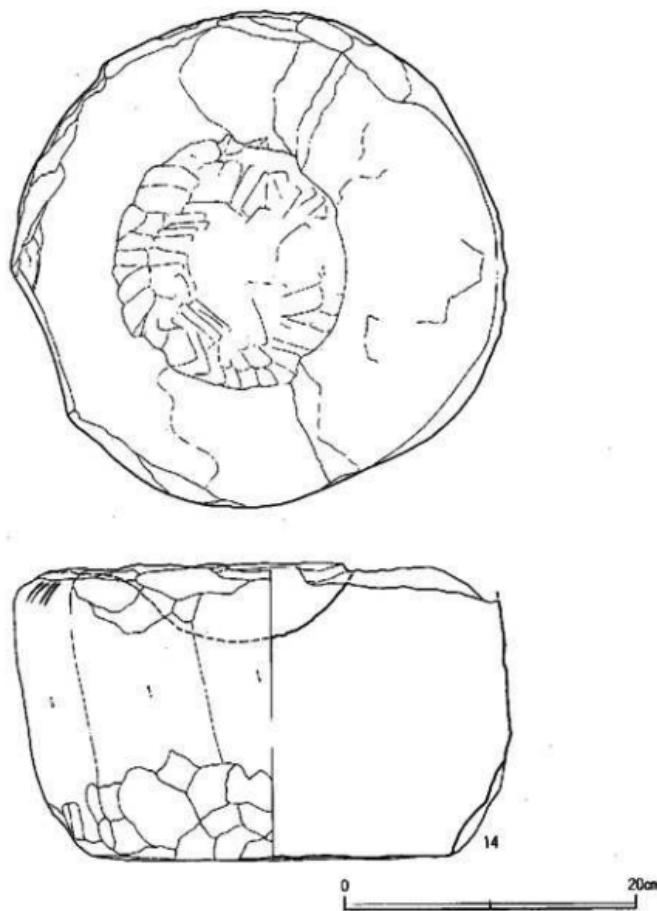


Fig. 7 SE09出土遺物実測図(2) (1/4)

世紀から12世紀初頭のものであろう。井筒から出土している。7は口縁端部を内側に折り曲げる瓦質の擂鉢である。16世紀前半に属し、大内氏に関係するものであろう。8～11・13は14世紀後半から15世紀前半にかけての備前の擂鉢である。13は良く使い込んでおりかなり磨耗している。12は瓦質っぽいやや軟質の擂鉢である。底径16.0cmを測る。Fig. 7-14は砂岩製の石製

品である。径34.0cm、高さ20.5cmを測り、上面中央部は径16.0cm、深さ5.5cm掘り空められている。底みは幅7cm前後の工具によって時計回り、あるいは反時計回りに粗く削られている。外面下端部も削りによって調修されている。用途ははっきりしないが、製作途中で上端部が大きく破損し、砥石に転用されたものであろう。上面及び側面は荒砥としてよく使い込まれている。Fig. 8-15は上製紡錘車である。復元径5.4cm、孔径1.0cm、最大厚1.6cmを測る。上面中央部はやや窪んでいる。

以上、SE09から出土した遺物を観察してきたが、時間的な幅がみられるものが多い。しかし、掘方出土の遺物で最も新しいものは15世紀代に属するので、SE09は15~16世紀の時期を考えておきたい。

**S E 22 (Fig. 9 ~ 11, PL. 3 + 7)** 調査区東寄りに位置する。梢円形の掘方を持ち長径は3.9m、短径は一部破壊されているのではっきりしないが3.0m程度になるものとみられる。断面は東側に段を有しながら窄まり、さらに途中で折れて壠底に至る。井筒は径60~65cmの植で、下端部が辛うじて残存していた。板材の幅は10cm前後である。

出土遺物は、輸入陶磁器、国産の陶器、土師器、滑石製品などである。Fig. 10~16~23は土師器である。16~18は底部がヘラ切りの皿である。16~17は口縁部が内湾し18は外反する。口径はそれぞれ9.5cm、8.8cm、10cmで、器高は1.1~1.3cmである。19は糸切り底の皿である。口径9.4cm、器高1.1cmを測る。20~23は杯で底は全て回転糸切りである。それぞれ形態が異なっており、20は口径12.7cm、器高2.9cm、最も大きい23は口径17.2cm、器高3.5cmを測る。24~27は白磁である。24はいわゆる口ハゲの皿である。口径9.6cm。25は口縁部が玉縁状になる白磁皿である。体部外面下半は露胎で、口径10cmを測る。26~31は青磁である。26は同安窯系の碗底部で外面に柳描文が見られる。27も同安窯系の平底皿で、見込に刻花文と鶴刺突文を施す。28~30は龍泉窯系の碗で、28~29は外面に片切形で鎧蓮弁文を施す。30は厚ぼったい作りで釉は緑がかり、見込に印花文がみられる。29~30は掘方から出土している。31は口縁部が短く外反し上面は平坦になる。臺形の器形になるものであろう。Fig. 11~32は東播系魚住窯の捏鉢である。復元口径25.0cm、残存高7.5cmを測る。13世紀後半~14世紀のものである。掘方から出土。33は14~15世紀に属する瀬戸のおろし皿である。34~36は滑石製品である。34は石鍋で口径23.0cmを測る。35は石鍋の破片を再利用して中央部を粗く削り取った皿状の石製品である。底部には鋸の部分を削り取った痕跡が残っている。全長6.7cm、幅4.4cm、高さ1.8cm、重さ70gを測る。36は石鍋の胴部破片である。外面にカーボンが厚く付着している。

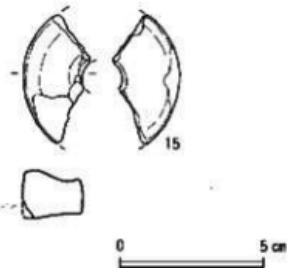


Fig. 8 SE09出土遺物実測図(3) (1/2)

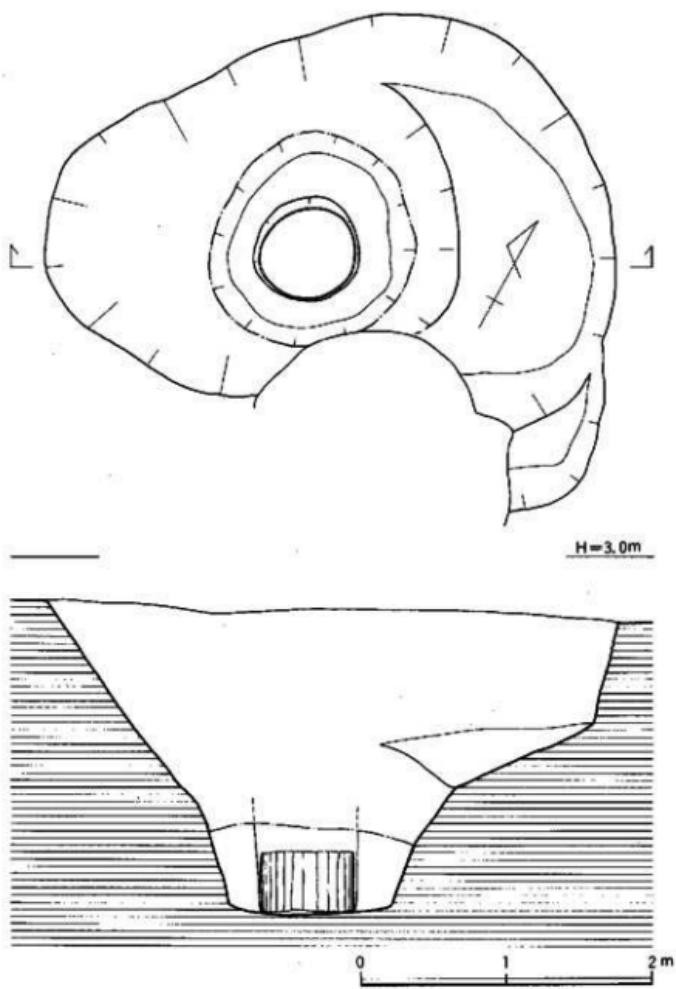


Fig. 9 SE22実測図 (1/40)

37は流文岩製の砥石である。いわゆる天草砥石によく類似している。4面とも砥面として使用している。残存長6.7cmである。38は鉄刀子の身の部分である。残存長5.0cm、身幅1.7cm、厚さ0.4cmを測る。

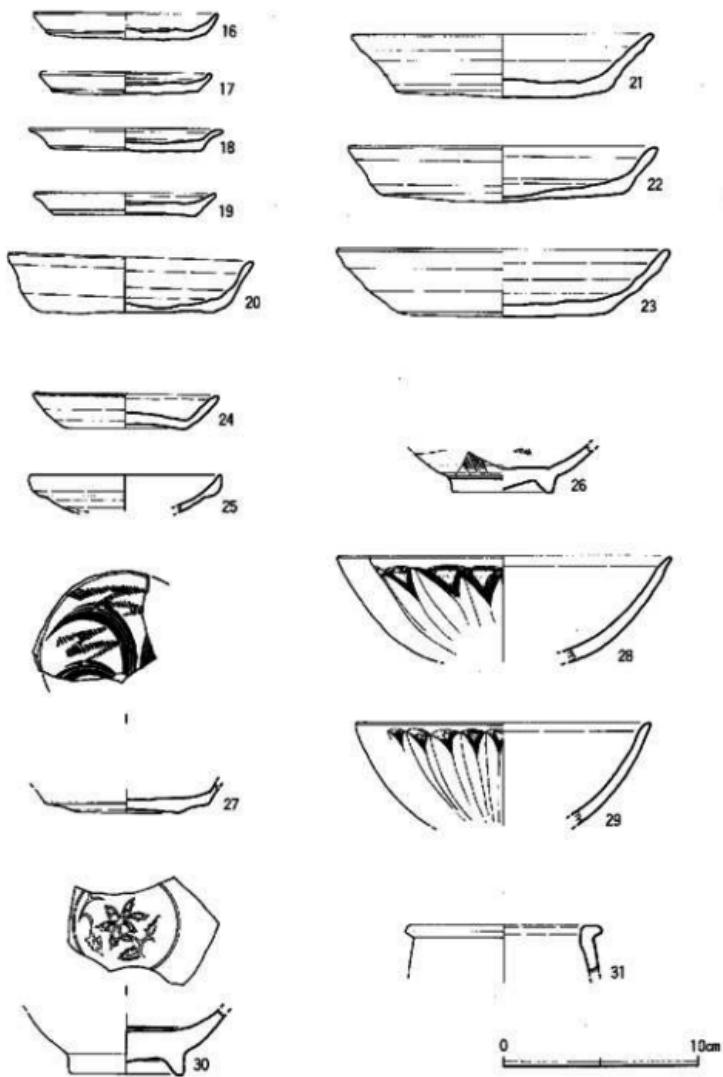
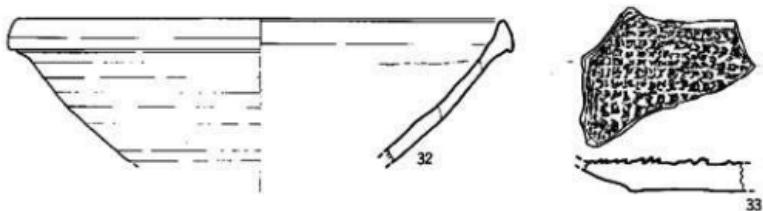
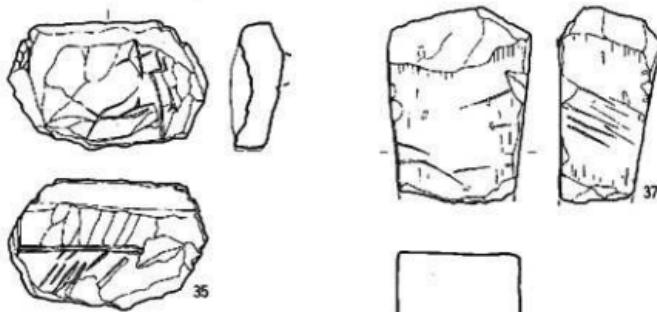


Fig.10 SE22出土遺物実測図(1) (1/3)



0 10cm



0 10cm

Fig.11 SE22出土遺物実測図(2) (1/2, 1/3)

SE22から出土した遺物は11世紀後半から15世紀にかけてのものである。井戸掘方の新しい時期の遺物は14~15世紀が中心となるので、井戸の作られた時期もこの頃になるのではないかと考えられる。

#### S E 24 (Fig.12・14, PL. 3・7)

SE22の北側に位置し、北側半分は調査区外に伸びている。掘方は直徑2.4mの略円形で、緩やかに窄まりながら壠底に至る。確認面からの深さは-1.5mで、底は海拔0mに近い。井筒ははっきりしなかったが井戸として取り扱った。

出土遺物は、糸切りの土師皿や壺、国産の陶器（備前）、中国産の輸入陶磁器類がある。図示したものは、Fig.14-39の白磁碗1点である。口径16.6cmで、内面に細い圓線を入れ、それ以下に彫刻文を施す。外面には施文は見られない。この白磁碗は井戸の埋没時に混入したもので、井戸の時期を示しているものではない。未同化の破片から検討すると、15世紀を前後する時期が考えられる。

#### S E 27 (Fig.13・14, PL. 4・7)

調査区東端部で検出した井戸址である。半分は調査区外へ伸びており、掘方の一部も基礎杭で破壊されている。やや椭円形の掘方で長径3.4m、短径2.8m程度なるものとみられる。断面は緩やかに窄まりながら壠底に達し、井筒の部分はさらに下まで掘り下げられている。井筒は少し南側に寄った位置に設けられ、網矢板によって半分以上切断されている。井筒には10cm弱の板材を組み合わせた構造が使われている。海拔下0.5mまで掘り下げたが湧水が激しく、掘り下げが不可能であった。他の井戸址に比べて掘方が深くなっている。

出土遺物は、輸入陶磁器、国産の陶器、土師器類がみられるが、掘方から近世の伊万里染付

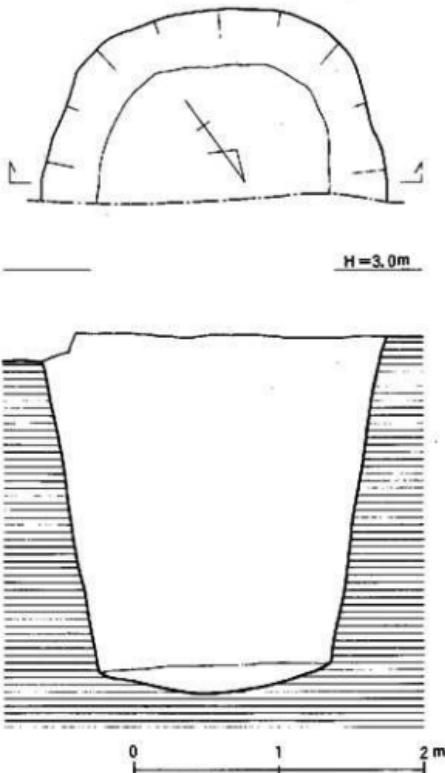


Fig.12 SE24実測図 (1/40)

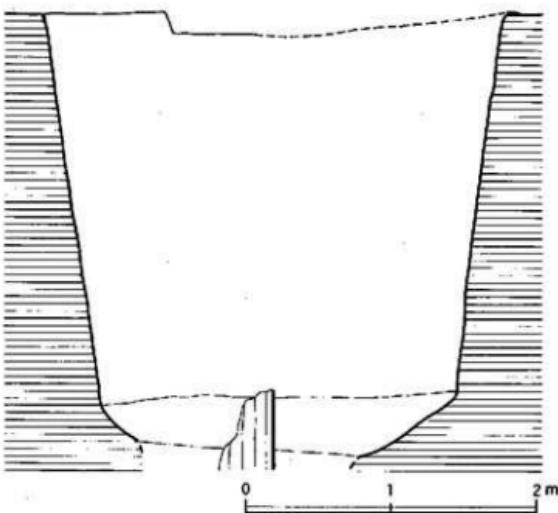
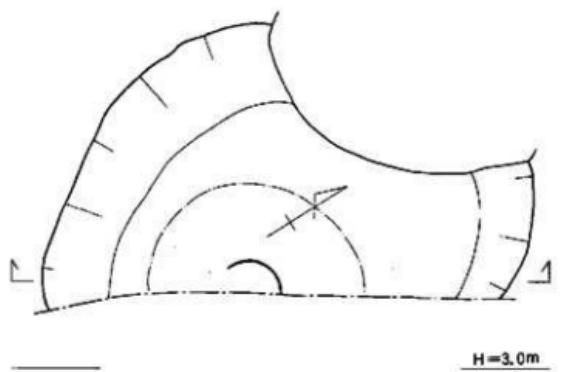


Fig.13 SE27実測図 (1/40)

磁器が出土しており、18世紀前半代の井戸址と考えられる。Fig.14-40は土師器の皿である。底部は糸切りで、口径8.9cm、器高1.2cmを測る。41は陶器碗の底部である。底径4.3cmで、灰色に近い精良な胎土を持つ。42は青白磁の合子蓋である。非常に薄い作りで口縁部は全て破損している。上面は型押して花弁を表現する。内面は露胎になっている。口径3.9cm、器高1.3cmを測る。43は滑石の石鍋の破片を利用した石鍤である。ほぼ長方形に整形し、端部には両面から擦り切りを入れて溝を作出している。横断面は方

形、縱断面は菱形を呈する。全長10.8cm、幅3.1cm、厚さ2.4cm、重さ140gを測る。外面の一部には石鍋の調整痕が観察される。44は小形の頁岩製の砥石である。白桃色を呈し、両面及び側面の一方が砥面として使用されている。手持ちの砥石であると考えられる。全長6.6cm、最大幅4.1cm、最大厚1.7cm、重さ56gである。45・46は上鉢質の上鉢である。大形のものと



Fig.14 SE24・27出土遺物実測図 (1/2, 1/3)

小形のものとふたつのタイプがある。45は小形のもので、褐色を呈している。半分以上破損しているが、残存高2.9cm、厚さ0.4cmである。46は大形のもので、胴径が5.3cm程度に復元できる。淡褐色を呈し、残存長4.2cm、最大器厚は0.9cmを測る。41～43・46は井戸址の掘方から出土している。44は井筒から出土。

以上、4基の井戸址をみてきたが、SE27が近世のものである以外は、調査区内では15世紀を中心とする時期にまとまりそうである。

## 2 土壙

**S K01** (Fig.5・16, PL.8) 調査区西端部で検出した土壙である。北側は基礎杭で破壊され、西側は調査区外へ伸びている。長径は1.7m以上で、深さ0.7mを測る。遺物は糸切底の土師皿、陶器壺、白磁などが出上している。Fig.16-47はいわゆる口ハゲの白磁皿である。口径11.0cm、器高3.5cmを測る。14世紀前半の時期である。

**S K02** (Fig.15) 調査区西側で検出した略円形の土壙である。長径は1.3mを測り、緩やかに窄まりながら壙底に至る。深さは0.35m。18世紀代の伊万里染付磁器が出土している。

**S K03** (Fig.15・16, PL.8) SK02の北側に位置する近世の土壙である。半分は北側の未調査区へ広がっている。長軸は2.1mで、現在の町割の方向と一致する。遺物は18世紀代に属する近世陶磁器が出土している。48は楊軸のかかった陶器灯明皿である。

**S K04** (Fig.15・16, PL.8) 調査区西側南寄りで出土した梢円形の土壙である。一部未調査区へ広がっているが、長径は1.2m前後になるものとみられる。断面は皿状に窪み、深さ0.4mを測る。遺物は、土師皿、瓦器、白磁碗である。49は回転ヘラ切り底の土師皿で、口径9.5cm、器高1.3cmを測る。12世紀前半に属する土壙と考えられる。

**S K06** (Fig.15・16) 調査区北西隅に位置し、大部分は未調査区へ広がっている。また、調査区内も基礎杭で殆ど破壊されているので実体がはっきりしない。近世の陶磁器類が出上している。51は楕の型押文がみられるオハジキであろう。径2.5cmである。

**S K07** (Fig.5・16, PL.8) 調査区北壁に位置し、大部分は未調査区に伸びると、基礎杭で破壊を受けているので実体が認めない。深さ0.2mで近世の遺物が出上している。50は楊軸のかかった陶器灯明皿である。52はミニチュアの擂鉢である。薬味入れか。53は青磁小碗で、釉は厚く、大きな貫入がはいる。

**S K08** (Fig.5) 調査区西側で出土した小形の土壙である。大部分は基礎攪乱で消滅している。出土遺物はみられなかった。

**S K10** (Fig.17~19, PL.5・8) 調査区中央部で出土した残りの良い土壙である。北側部分は基礎攪乱によって破壊されているが、長径1.8m、短径1.5m、深さ0.8mを測る。遺物は、土師器壺・皿、瓦器碗、国産陶器、白磁、龍泉窯系や同安窯系の青磁などがある。土師器の量は非常に多く、底部は回転ヘラ切りから糸切りまである。底面には板目痕がみられるものが多い。Fig.18-54-62は図化した土師器である。54・55はヘラ切りの土師皿で、口径8.8cm~9.3cm、器高1.1cmを測る。56~60は糸切底の土師皿で、口径9.0~9.6cm、器高1.0~1.3cmを測る。内底面は横方向に手ナデが施され、外底面に板目痕が付く。61・62は壺である。61は全体が外反しながら口縁部に至る。口径15.6cm、底部10.2cm、器高2.5cmを測る。62の口径は61と同じであるが器高が3.2cmとやや高くなる。61・62とも底部は回転糸切りで、内底面に横方

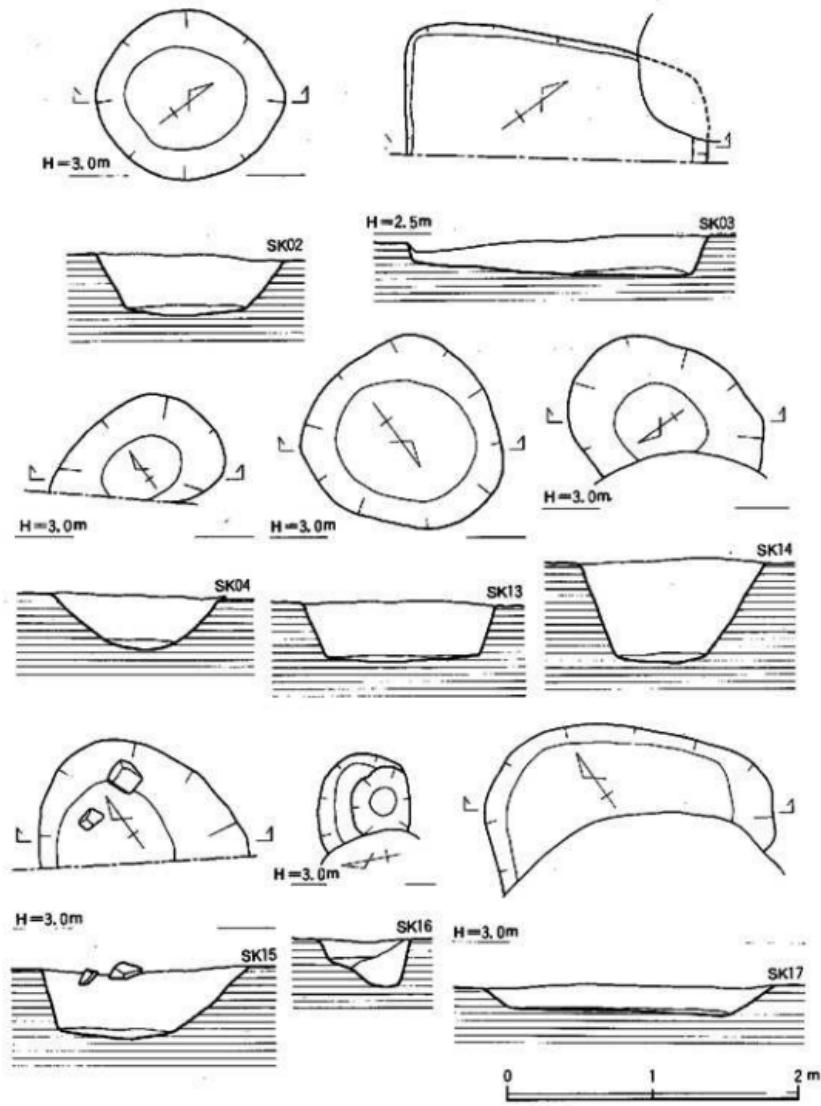


Fig.15 SK02~04・13~17土壤実測図 (1/40)

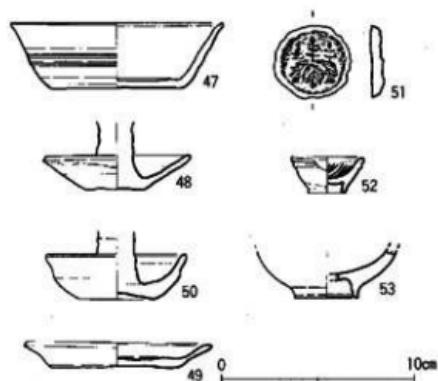


Fig.16 SK01・03・04・06・07出土遺物実測図 (1/3)

向の手ナデ調整が施される。Fig.19-64は滑石製小形容器の未完成品である。石鍋の破損品を再利用したもので、全体を丸く整形し把手が削り出されている。上面は窪みを作るため2重の圓線が入れられ、一部は整状工具で掘り窪められている。体部周縁は細かな削りがみられウロコ状になっている。把手部分も同様な調整で、裏面は整状工具で少し掘り窪められている。底面は各方向から平坦に削られ整形されているが、稜線ははっきりしない。SK10は、出土遺物から12世紀後半代に位置づけられよう。

#### S K 11 SK10の北側に位置

し半分は未調査区へ広がっている。SK12の調査の際、その上部で検出した浅い土壌である。記録もとらないまま掘り下げてしまった。灰黒色の埴土で近世の土壌と考えたが、遺物は上部皿・环・瓦器碗、白磁など、SK12と同時期と考えられるものが出土している。

#### S K 12 (Fig. 5・20, PL. 8・9)

SK10の北側に位置する土壌である。半分は未調査区へ伸びており、南側は基礎擾乱によって破壊されているので実体が掴みにくい。ほぼ円形を呈すると考えられ、上面で3.9m前後を測

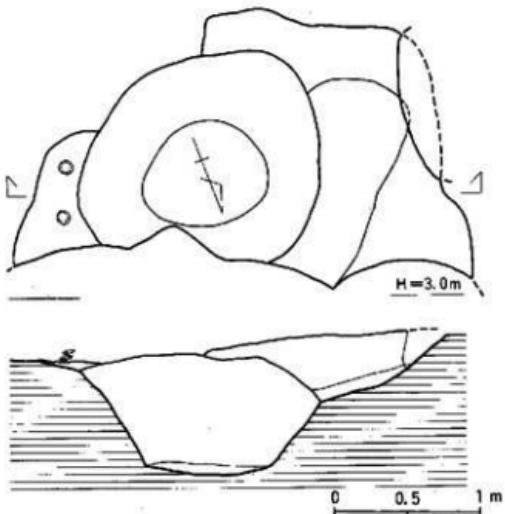


Fig.17 SK10土壤実測図 (1/40)

る。掘方はやや段を有しながら壙底に至る。壙底は径1.2m前後になるものとみられ、掘方上面からの深さは-1.5mである。隣接するSE24とはほぼ同じ深さになり、井筒などは確認できなかったが、掘方が深いため或いは井戸壁になるかも知れない。遺物は土師器の环と皿が非常

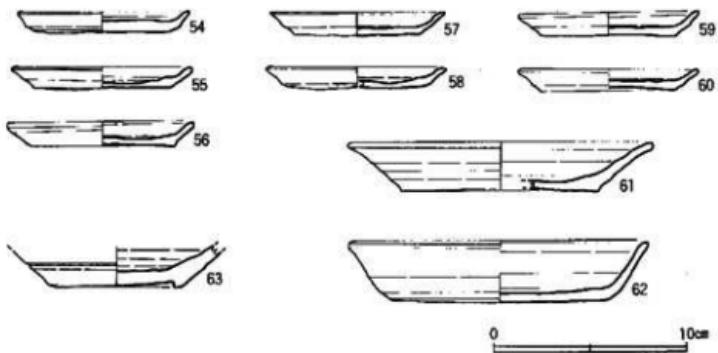


Fig.18 SK10出土遺物実測図(1) (1/3)

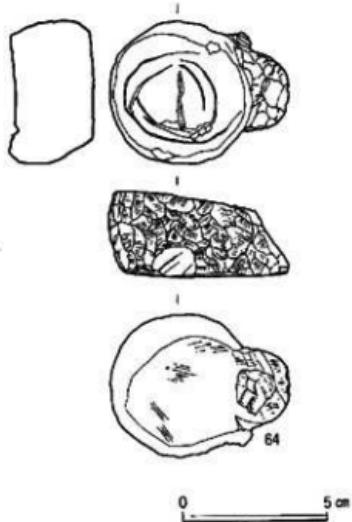


Fig.19 SK10出土遺物実測図(2) (1/2)

に多く、SK12出土全遺物の90%を占める。

底部は回転糸切りが中心で、板目痕の残るものが多い。土師器の他は瓦器碗、中国及び同産の陶器、白磁碗・皿などが出土している。

Fig.20-65~84は土師器の皿と壺である。65~69は底部ヘラ切りの土師皿で、口径9.1~9.9cm、器高1.1~1.2cmを測る。67・68には底面に板目痕が残る。70~79は回転糸切り底の土師皿である。口径9.0~9.7cm、器高1.0~1.4cmを測る。72・74を除いて全て底面に板目痕が残る。80~84は壺で、底部は回転糸切りである。口径14.5~16.2cmを測り81・82の口径はやや小さい。器高は2.3~3.2cmで、83の2.3cmを除くとあとは3.0cm前後でまとまる。81・82・84には底面に板目痕が残る。内底面は全て横方向に手ナデが施される。85は白磁碗である。口径15.0cm、器高5.5cm、底径6.5cmを測る。見込は輪状に釉をカキ取る。

体外半釉。86は口径15.0cmの白磁碗である。底部は欠失する。87は口縁部を欠失する白磁碗である。見込は輪状に釉をカキ取り、外面は高台近くまで施釉される。底径6.8cmを測る。SK12

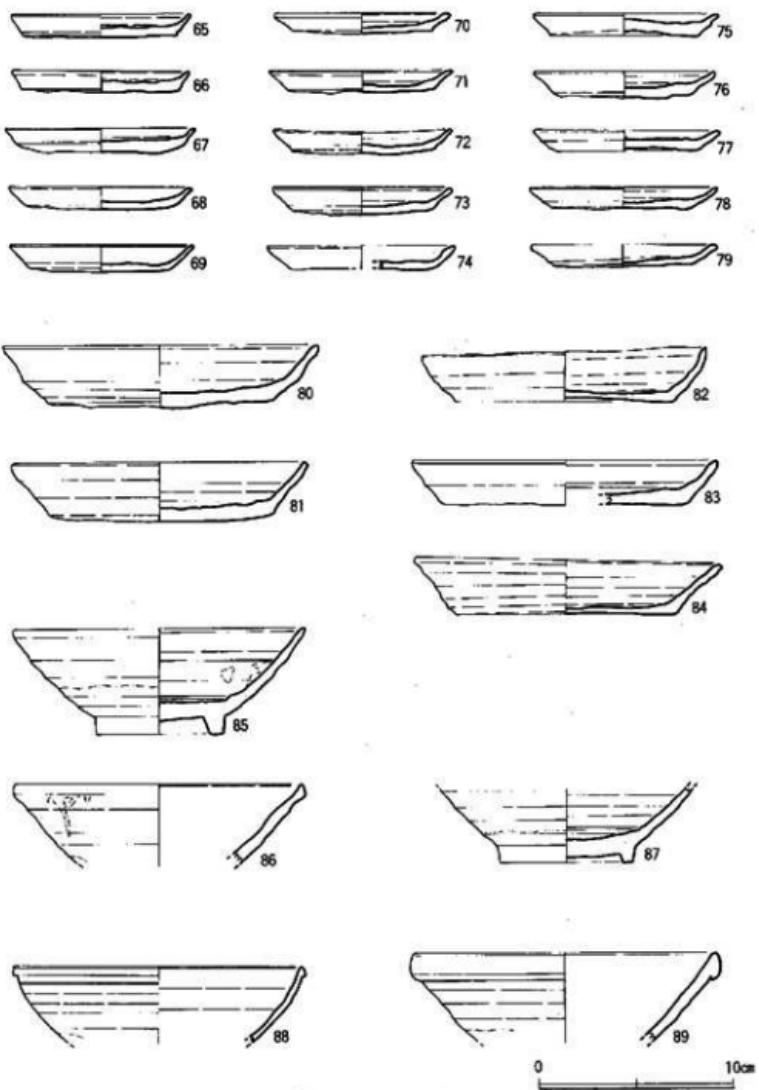


Fig.20 SK12・13出土遺物実測図 (1/3)

は出土遺物から12世紀前半代に属すると考えられる。

**S K 13 (Fig.15・20)** 調査区中央部やや北寄りで出土した略円形の土壙である。径1.4m、深さ0.4mを測る。ヘラ及び糸切り底の土師皿・壺、瓦器碗、白磁碗・皿などの遺物が出土している。Fig.20-88・89は白磁碗である。88は口縁端部を玉縁状に小さく折り曲げた口縁部を持ち、体部はやや丸味を持っている。灰緑色の釉が薄くかかり、体外は半釉になる。口径15.0cmで、底部は欠失する。89は玉縁口縁を持つ白磁碗で、口径15.9cm。体外は半釉で底部を欠失する。SK13は、出土遺物から12世紀初めに位置づけられよう。

**S K 14 (Fig.15)** 調査区中央部に位置し、西側は攪乱によって破壊されている。梢円形を呈し、長径1.4m、短径1.1m、深さ0.7mを測る。出土遺物は少ないが、ヘラ切りの土師壺、瓦器碗、白磁底部などがある。12世紀初めの時期を考えておきたい。

**S K 15 (Fig.15)** 調査区中央部南側で出土したやや梢円形を呈する土壙である。南側半分は未調査区へ広がっているので長径は分からぬが、短径は1.4m、深さ0.45mを測る。壙中に15~20cmの礫が2個混入していた。遺物は糸切りの土師皿・壺、瓦質の土鍋などが出土している。14世紀から15世紀にかけての土壙であろう。

**S K 16 (Fig.15)** 調査区中央部で検出した小形の土壙である。SK14に切られたような格好になっているが、SK12よりも新しい。推定長径0.8m、短径0.6m、深さ0.3mを測る。出土遺物は、底部が回転糸切りの土師皿、施釉陶器の壺などがある。

**S K 17 (Fig.15, PL. 5)** 調査区中央部に位置する梢円形の土壙である。長径は2.0m、短径は南側が基礎杭で壊れているのではっきりしない。深さは0.2mである。遺物は、糸切り底の土師壺・皿、瓦器碗、龍泉窯系の青磁碗、白磁などが出土している。12世紀後半から13世紀にかけてのものであろう。

**S K 18 (Fig. 5, PL. 9)** 調査区中央部北側に位置し、SK12に切られた土壙である。南側は基礎杭で壊れており大きさがはっきりしない。深さは0.35mである。遺物は上部に新しい時期の遺物もみられたが、中心は12世紀前半から中頃にかけての時期であろう。底部が回転糸切りで板目压痕のみられる土師壺・皿、白磁碗・皿などが出土している。Fig.23-90~92は土師皿である。口径7.1~9.0cm、器高1.1~2.3cmを測る。時期的に新しいものも含まれる。93は白磁の平底皿である。口径10.5cm、底径3.4cm、器高2.1cmを測る。

**S K 19 (Fig. 5・23)** 調査区中央部で出土した土壙である。近現代の井戸に切られており大きさがはっきりしない。推定長径1.5m、深さ0.2mで、断面は浅い皿状を呈する。遺物量は少ないが、糸切り底の土師皿、白磁皿などが出土している。Fig.23-94は輪高台を持つ白磁皿である。口径10cm、底径4.4cm、器高2.35cmを測る。見込は輪状に釉をカキ取り、体外は半釉になる。遺物が少ないのではっきりしないが、12世紀前半代から中頃の時期を考えておきたい。12世紀後半のSK10からは東側の一部が切られている。

**SK20 (Fig.22・23)** SE09に切られた土壙で西側に位置する。梢円形を呈すると考えられるが、長径は分らない。直径は1.4m、深さ0.65mである。出土遺物は、糸切り底の土師壺・皿、中国陶器、白磁碗・盏、同安窯系の青磁などがある。Fig.23-97は滑石製の石鍋片である。鉢の下面から全体にかけてはカーボンが多量に付着している。SK20は出土遺物から12世紀後半～13世紀前半の時期と考えられる。

**SK21 (Fig.5)** SE09と搅乱によって切られており、実体が埋めない。深さも0.2m以下の浅いものである。出土遺物はみられなかった。

**SK23 (Fig.5)** SE24に切られた小形の土壙である。糸切り底の土師皿、白磁、青磁などが出土している。Fig.23-95は片切影の螭蓮弁文を持つ青磁碗である。復元口径16.4cmで、14世紀前半代に属するものであろう。

**SK25 (Fig.21・24, PL. 6・9・10)** 調査区東側に位置する。SE27、試掘トレンチ、基礎搅乱によって切られており、大きさがはっきりしない。略梢円形を呈すると推察され、直径1.2m、深さ0.4mを測る。遺物は、上師壺・皿、磁灶窯の黄釉盤、口ハゲの白磁、青銅製金具、砥石などが出土している。壙中には焼土塊が混入していた。Fig.24-100～109は土師皿である。100はヘラ切りで、口径9.3cm、器高1.2cmである。残りの土師皿は全て回転糸切りで板目痕の付くものが多い。口径8.5～9.2cm、器高0.9～1.7cmで、器高は1.1cm前後が最も多い。110～114は土師壺である。110～113は口径12.8～13.6cm、器高1.9～2.5cmを測る。112は底部が回転ヘラ切りで、他は回転糸切りである。110・111には底面に板目痕が残る。114は時期的に古い

ものが混入したもので、粘土組巻き上げで整形されている。口径16.8cm、器高4.2cmを測る。

11世紀代のものである。115は青銅製の飾金具の一種とみられ、幅5.8cm、高さ4.1cm、上端部の厚さ0.6cmを測る。形状は、銀杏の葉の形に似ており、上端部に4mmの釘穴をあける。両端部には2本の鋲が残り下端部は輪花状を呈する。中央部は窓になっており、下縁に放射状の細沈線が観察される。116は砂岩製の砥石である。粗研であり、砥面は2面ある。片面には上部に溝状の擦切痕が数条認められ、刃物の先端部を研いだものであろうか。半分折損しているが、残存長13.1cm、幅9.1cm、厚さ6.2cmを測る。SK25は、口ハゲの白磁が出土しており14世紀前半の時期と考えられる。

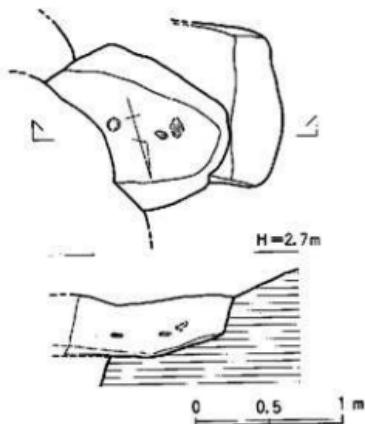


Fig.21 SK25土壙変遷図 (1/40)

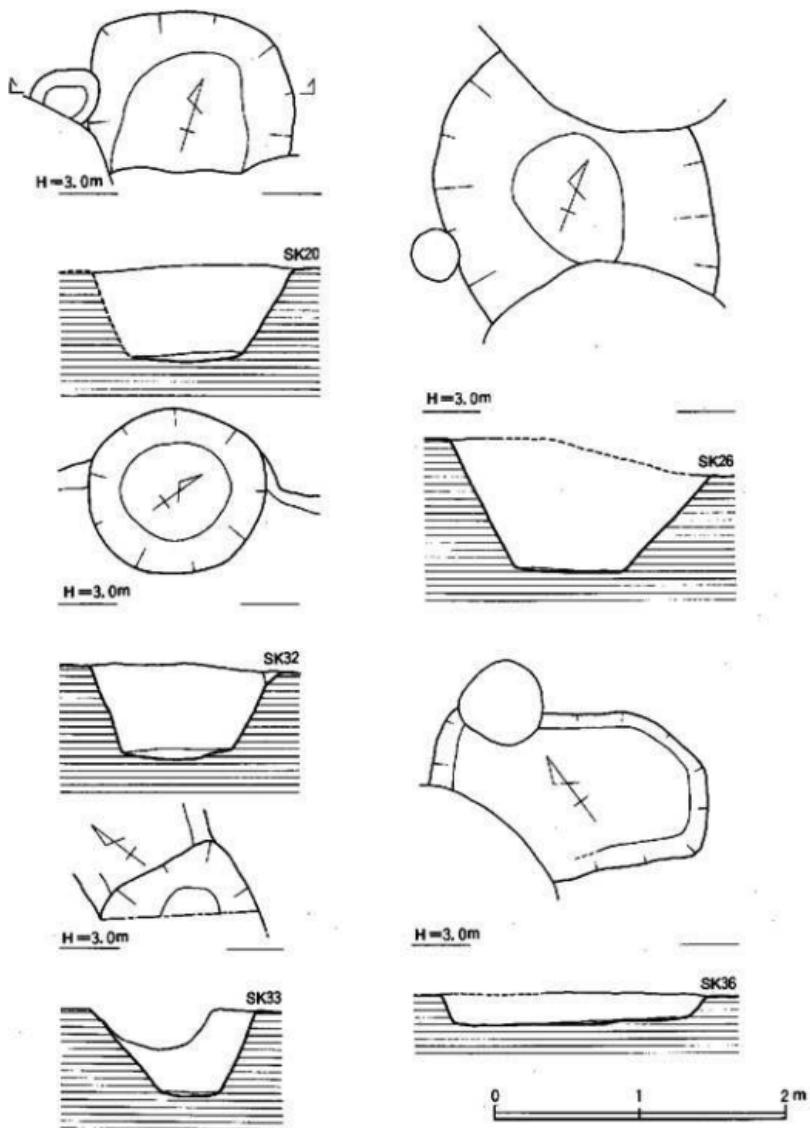


Fig.22 SK20・26・32・33・36土壤実測図 (1/40)

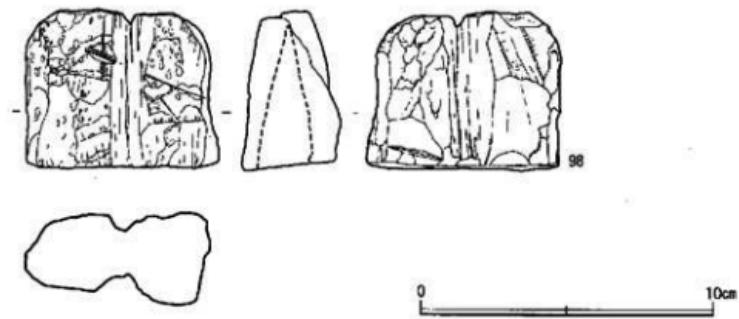
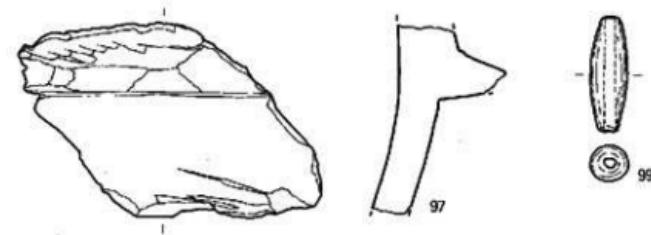
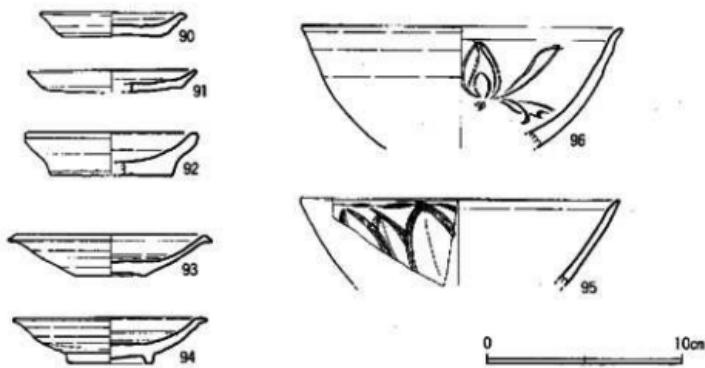


Fig.23 SK18~29出土遺物実測図 (1/2, 1/3)

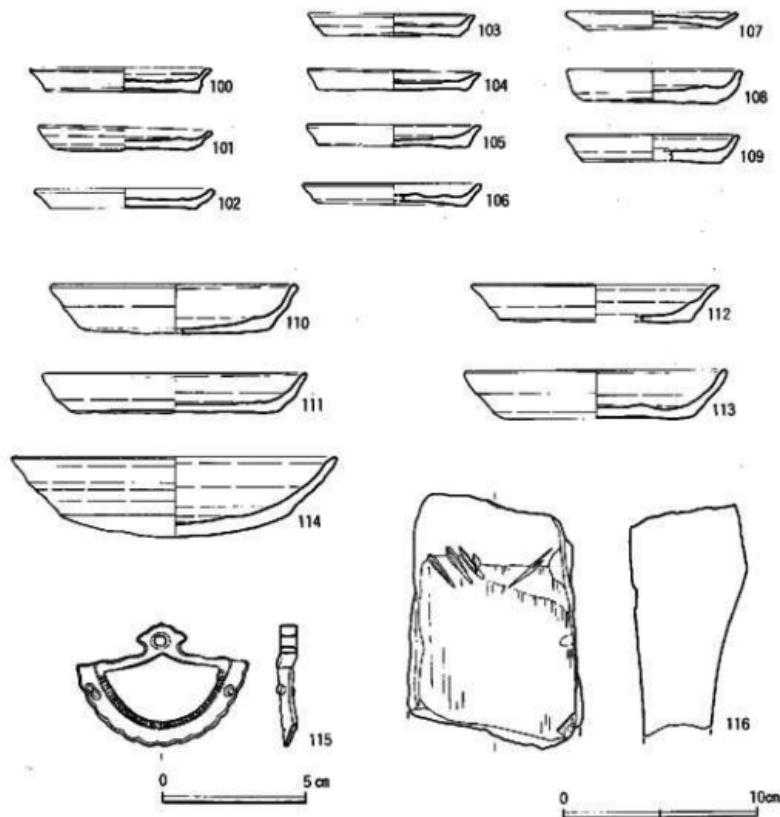


Fig.24 SK25出土遺物実測図 (1/2, 1/3)

**SK26 (Fig.22・23、PL. 6・10)** 調査区東側に位置し、両端部を基礎攪乱で破壊された椭円形を呈する土壙である。短径1.8m、深さ0.9mを測る。遺物は、糸切り底に板目痕の残る土師壺・皿、瓦、瓦器碗、国産及び中国陶器、白磁碗・皿、龍泉窯系及び同安窯系の青磁碗、滑石製の石錘などが出土している。12世紀後半から13世紀前半にかけての時期である。Fig.23-96は龍泉窯系の青磁蓮花刻花文碗である。口径16.5cmを測る。98は滑石製の有溝石錘である。滑石の自然縫を加工し、両面中央部にV字に近い溝を擦り切りで入れる。先端部の断面は薄く

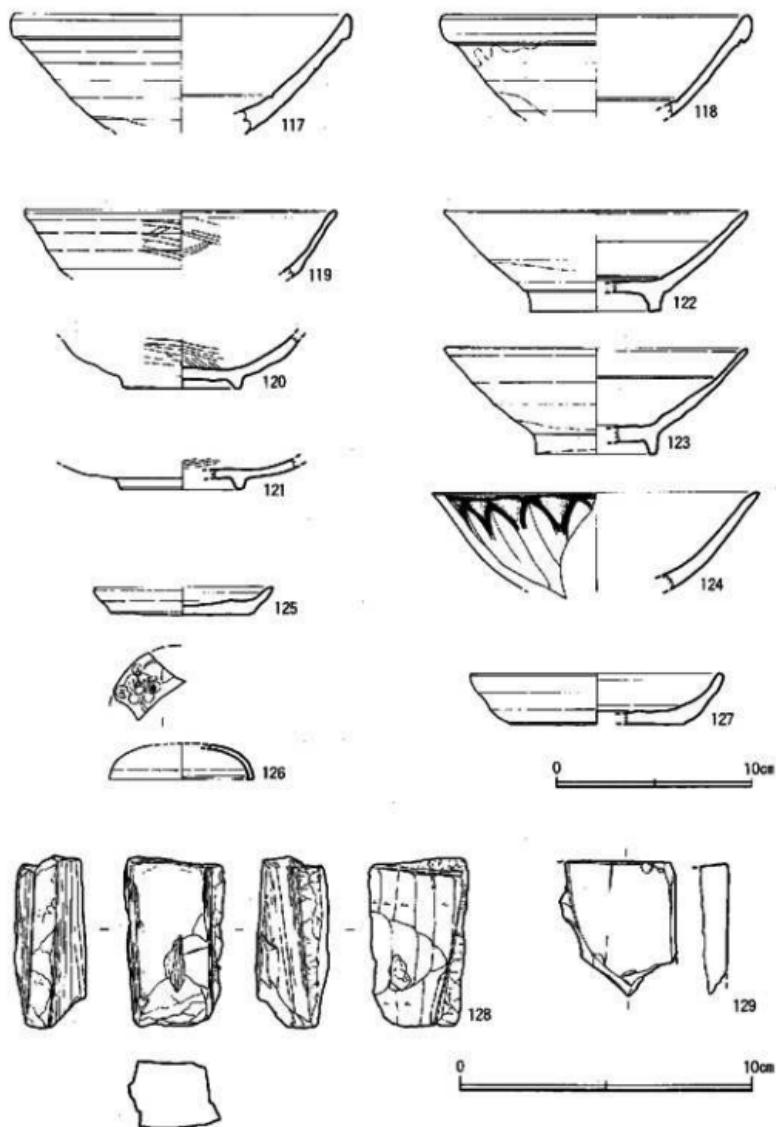


Fig. 25 SK30~36出土遺物実測図 (1/2, 1/3)

なって尖った状態を呈する。下端部はノコギリで切り落とす。全長5.5cm、最大幅6.5cm、最大厚3.0cm、重さ146kgである。両面に隕面を残し、近くの立花山の滑石を使用したものか。

S K 28 (Fig. 5) SE22に切られて南側に位置する土壙である。一部しか残存していないので全体の様子は分らない。遺物は、糸切りの土師皿、中国陶器、青磁、白磁碗・皿などが出土している。白磁皿の中にはいわゆる口ハゲのものが多い。14世紀前半の時期であろう。

S K 29 (Fig. 5・23) 調査区南東隅で検出された略円形の土壙である。大部分は調査区外へ伸びており全体の様子ははっきりしない。糸切りの土師皿・皿、上鍵、瓦器碗、國産陶器、瓦、龍泉窯系の青磁碗、白磁の碗などが出土している。出土遺物から14～15世紀の時期と考えられる。Fig.23-99は管状土鍬である。全長3.9cm、径1.3cm、孔0.4cmを測る。

S K 30 (Fig. 5・25) 調査区西端部に位置し、SK01に切られる。土壙の大部分は未調査区へ広がり全体的な様子ははっきりしない。出土遺物は糸切りの土師皿、瓦器、陶器碗・壺、白磁などがある。Fig.25-117・118は白磁碗である。ともに玉縁状口縁を有し、117が口径17.5cm、118が16.0cmを測る。見込には圓線が廻り、体外は半軸になる。この白磁碗は土壙の時期を示すものではなく、古いものの混入であろう。実際は他の遺物から15～16世紀の時期と考えられる。

S K 31 (Fig. 5) SK02とSK03に切られている楕円形の土壙である。長径1.3m、短径0.7m、深さ0.25m前後である。出土遺物は少なく、糸切りの上師皿・皿、東播系の捏鉢などが出土している。14世紀に位置付けられる土壙である。

S K 32 (Fig.22) SD05に切られて下部で出土した略円形を呈する土壙である。径1.2m、深さ0.65mを測る。遺物はヘラ切りや糸切りの土師皿・皿、瓦器、上縁状口縁を持つ白磁碗などが出土している。12世紀初めの時期と考えられる。

S K 33 (Fig.22) SK32の南側に位置する近世の上鍬である。半分は未調査区へ広がる。近世の伊万里染付磁器などが出土している。

S K 34 (Fig. 5) 調査区南西で検出した土壙である。半分は未調査区へ広がっているので全体の様子ははっきりしない。遺物は土師器、瓦器、青磁などが出土している。14～15世紀の時期を考えておきたい。

S K 35 (Fig. 5・25) 調査区中央部に位置し、SE09に切られている。略円形を呈する土壙で、径1.6mを測る。遺物は、糸切りの土師皿・皿、白磁の碗・皿が多い。12世紀中頃の時期であろうか。Fig.25-119～121は瓦器碗である。119の口径は16.1cmを測る。内外面ともヘラ巻きが施される。

S K 36 (Fig.22・25、PL.10) 調査区中央部南側で出土した土壙である。一部はSK15に切られている。出土遺物は、ヘラ切り及び糸切りの土師皿・皿、瓦器碗、褐釉の輸入陶器、白磁の碗・皿などである。Fig.25-122・123は白磁の碗である。見込は輪状に釉をカキ取り、体外

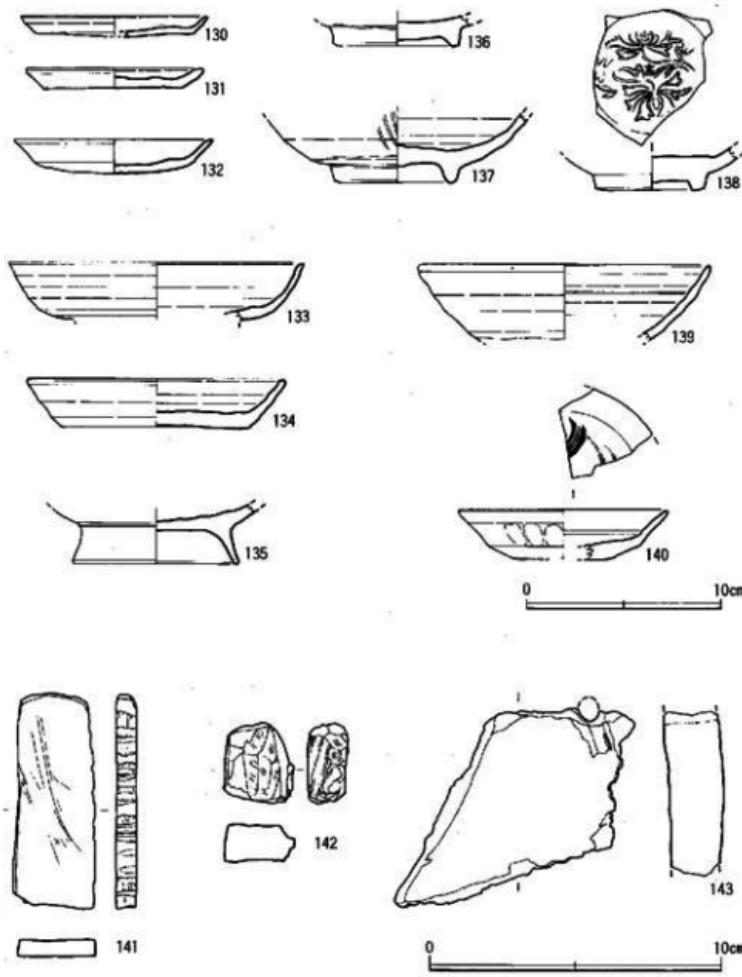


Fig.26 溝・柱穴出土遺物実測図 (1/2, 1/3)

は半釉になる。124は片切形による薺蓮弁を持つ青磁碗である。口径16.8cm。128は滑石の石錐片を再利用して作られた石錐の未成品である。3面をノコギリで切り落しており、全長5.8cm。

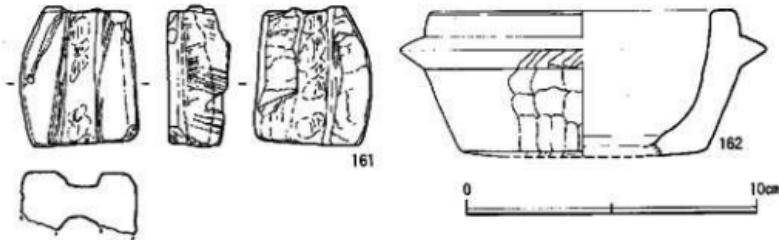
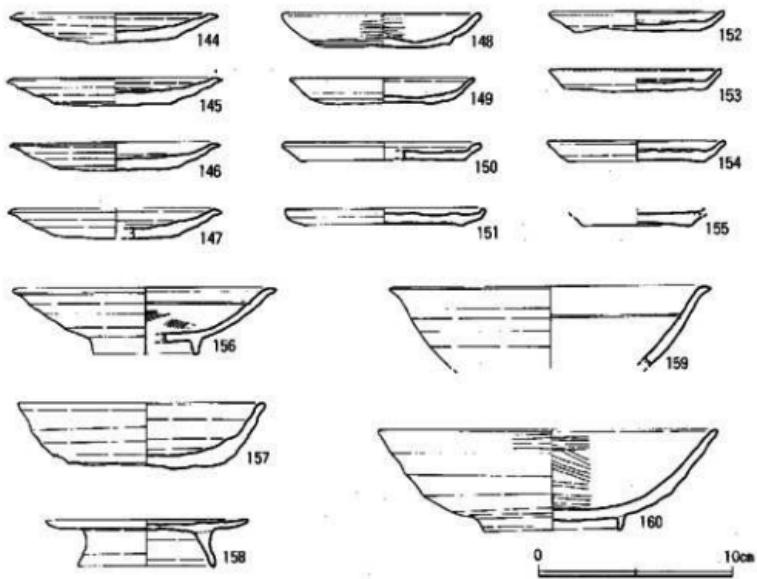


Fig.27 包含層出土遺物実測図 (1/2, 1/3)

幅3.4cm、厚さ2.5cm、重さ80gを測る。36は小形の砥石の破損品である。

**S K 37** (Fig. 5 - 25, Pl.10) SE22の北側に位置し、SE22に切られる土壌である。円形を呈するとみられ、土師壺・皿、中国産陶器、白磁、青磁などが出土している。Fig.25-125は土師皿である。口径9.2cm。126は白磁合子の蓋である。型押しで花文を描く。口径7.4cm、器高1.8cmを測る。127は糸切り底の土師壺である。SK37は遺物から13世紀後半代か。

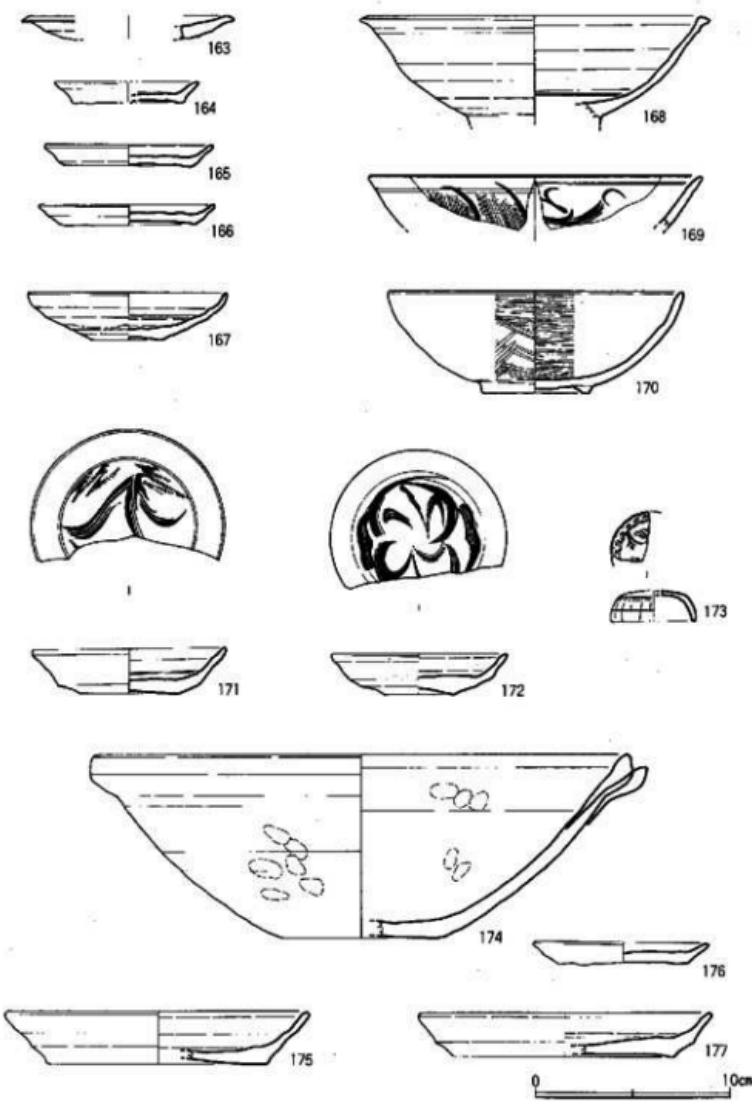


Fig.28 確認面作出土遺物実測図 (1/3)

### 3 溝・柱穴など

S D 05 (Fig. 5・26) 調査区西側で検出した幅0.8~1.0mの深い近世溝である。主軸はN 36°Eをとり、現在の町割と同じである。18世紀後半代の近世陶磁器が多く出土している。Fig.26-143は滑石製石鍋の再利用品である。上部に径0.7cmの孔があけられている。

柱穴 (Fig. 5・PL.11) 調査区全面に広がっており、遺物の出土したものは67個ある。調査面積が狭いので建物としてまとめることができなかった。ここでは主要な遺物について説明しておきたい。Fig.26-130~135は土師器である。130は口径9.6cmの土師皿で、SP42出土。131も土師皿で口径9.1cm、SP19出土。132は底部が回転ヘラ切りの土師皿である。口径10.2cm、器高1.8cmで、SP14から出土している。133は同じくSP14から出土した壺である。口径15.1cmで高台が付く。134は口径13.4cm、器高2.5cmの壺である。SP40出土。135は高台付の壺で底径8.6cm、SP47出土。136は白磁碗の底部である。SP57出土。137は同安窯系の青磁碗で、外面に片切彫で粗い平行線を入れる。SP19出土。138は龍泉窯系の青磁碗である。見込に「吉」と蓮花の印花文が見られる。SP23から出土している。139はSP45から出土した白磁碗である。口径15cm。140は同安窯系の青磁皿である。見込に刻花と模制突文がみられる。口径10.7cm、SP42から出土している。141は手持ちの砥石である。両面及び側面を砥面として使用し、一方の側面には刻目を入れる。頁岩製で残存長7.4cm、幅2.7cm、厚さ0.6cm、重さ26gである。SP51出土。142はSP29から出土した滑石製品の未成品である。石鍋の破片を転用して各面をケズリ調整したもの。外面に石鍋の名残りのカーボンが付着している。長さ2.7cm、幅2.3cm、厚さ1.3cm、重さ16gを測る。

包含層・遺構確認面他出土遺物 (Fig.27・28、PL.11・12) 包含層とは遺構の基盤になっている黄褐色砂層のことと、砂層の少し汚れた部分から遺物が出土している。Fig.27-144~154は土師皿である。144~147は底部ヘラ切りで、浅い器形を持ち、口縁端部は外方へ尖る特徴をもっている。口径10.7~11.0cm、器高1.4~1.5cmで均一である。11世紀に属するものであろう。148~151はヘラ切りの底部を持ち、板目压痕が見られる。148は内外面ともヘラ磨きが施される。152~154は糸切り底の皿で板目压痕が付く。口径8.8~9.2cm、器高1.0~1.2cmを測る。155は口ハゲの白磁皿、156は高台を持つ白磁皿である。見込に簡描文が見られる。口径13.7cm、底径5.7cm、器高3.4cmを測る。159は口径16.6cmの白磁碗である。157は口径12.7cm、器高3.2cmの土師壺で、底部は糸切りで板目痕が付く。158は高台の付く土師皿である。口径10.4cm、底径7.0cm、器高2.4cmを測る。160は内黒の壺である。内外面ともヘラ磨きが施され、口径17.6cm、底径7.0cm、器高5.3cmを測る。161は滑石製の有溝石錐である。両面に「U」字状の溝を掘り込み、底はヤリガンナ状の工具で横方向に削り、溝を深くしている。上・下端はノコギリで切断している。全長4.8cm、幅3.9cm、残存厚2.1cm、重さ66gである。採集遺物。

162は小形の滑石製石鍋である。復元口径10.3cm、器高5.0cm、厚さは1.0cm前後である。やや粗雑な作りで、突帯の幅や削出位置が少しづれている。161を除く以上の遺物が包含層から出土したものである。Fig.28-163-173は遺構を確認する際出土した遺物で、本来は遺構に伴っていたものであろう。163は口縁端部が外方へ尖る口縁を持つ土師皿である。底部はヘラ切りで、同様なものが包含層からも出土している。164-166は糸切り底の土師皿である。底面に板目痕が残る。167は白磁皿で、口径10.3cm、器高2.5cmである。168は口径18.0cmの白磁碗である。見込に圓線が1条めぐり、口縁端部は外方へ尖る。169は同安窯系の青磁碗である。復元口径17.2cm。170は黒色を呈した瓦器碗で、内外面にヘラ磨きを施す。特に内面は厳密にヘラ磨きされる。口径15.2cm、底径5.4cm、器高5.3cmを測る。171は同安窯系、172は龍泉窯系の青磁皿である。171は見込に刻花文と彌刺突文、172は刻花文を施す。173は青白磁の合子蓋である。口径4.3cm。174-177は擾乱部分から出土した遺物である。174は東播系の捏鉢である。復元口径27.3cm、器高9.5cmを測る。175・177は糸切り底の土師壺である。底面に板目痕が残る。口径15.1-15.6cmである。176は口径9.2cm、器高1.1cmの土師皿である。糸切り底で、板目痕が残る。以上、各遺物を見てきたが、包含層出土の遺物は古いものが多く11世紀後半から12世紀前半にかけてのものであろう。

### III おわりに

箱崎遺跡群第3次調査は、調査面積は狭かったが、菖崎宮北側の通称大学通りに面する部分では初めての調査であった。生活面の重層的な堆積はみられなかったが、これまで説明してきたように各時期の遺構・遺物が検出された。最も古い時期のものは11世紀後半代の遺物があげられる。茶盤の黄褐色砂層が少し汚れた部分から出土したもので、遺構としてまとめるることはできなかつたが、一帯にはこの時期から集落の形成が始まったと考えて差しつかえあるまい。11世紀の終りから12世紀中頃にかけてはSK04・12-14・18・19・32・35と遺構が増加していく。その中でもSK13や32は時期的に古いものである。SK12は、土壤として取り扱っているが遺構が深く、井戸址の可能性も否定できない。12世紀後半から13世紀にかけては遺構の数が減少する。SK10・17・20・26がこの時期の土壤であろう。14世紀前半代になるとまた遺構の数が増加する。SK01・23・25・28・31・36・37などがこの時期に相当する上塙群と考えられる。14-15世紀になると遺構の種類も増え、SK15・16・29・34、SE09・22・24などがみられるようになる。SK30は15-16世紀の遺物を含む土壤である。近世の遺構は主に18世紀以降のものが多く、SK02・03・06・07・11・33、SD05、SE27などがあげられる。溝及び土壤の一部は現在の町割と同じ主軸方向をとる。以上、第3次調査地点では、11世紀代から集落の形成が始まつて、14-15世紀には定形化した集落が形成されていたと考えることができる。

# P L A T E S



調査区全景（東から）



▲(1) 箱崎の街並と筥崎宮（北から）

▼(2) SE09出土状況（西から）





▲(1) S E 22出土状況（西から）

▼(2) S E 24出土状況（南から）

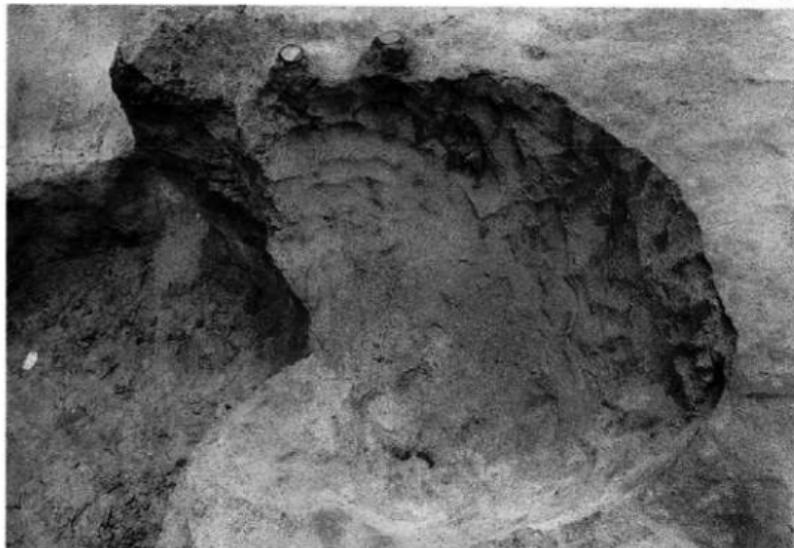




▲(1) S E 27出土状況（西から）

▼(2) S E 27井筒出土状況（西から）





▲(1) SK10出土状況（西から）

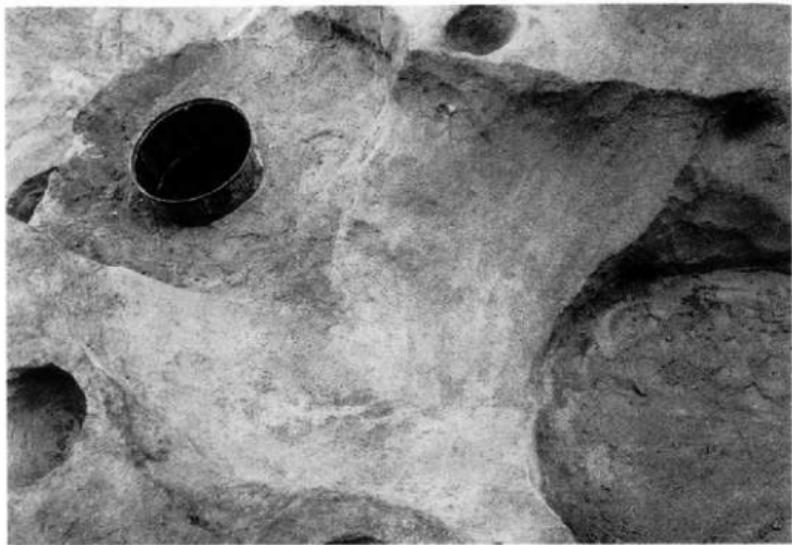
▼(2) SK17出土状況（東から）

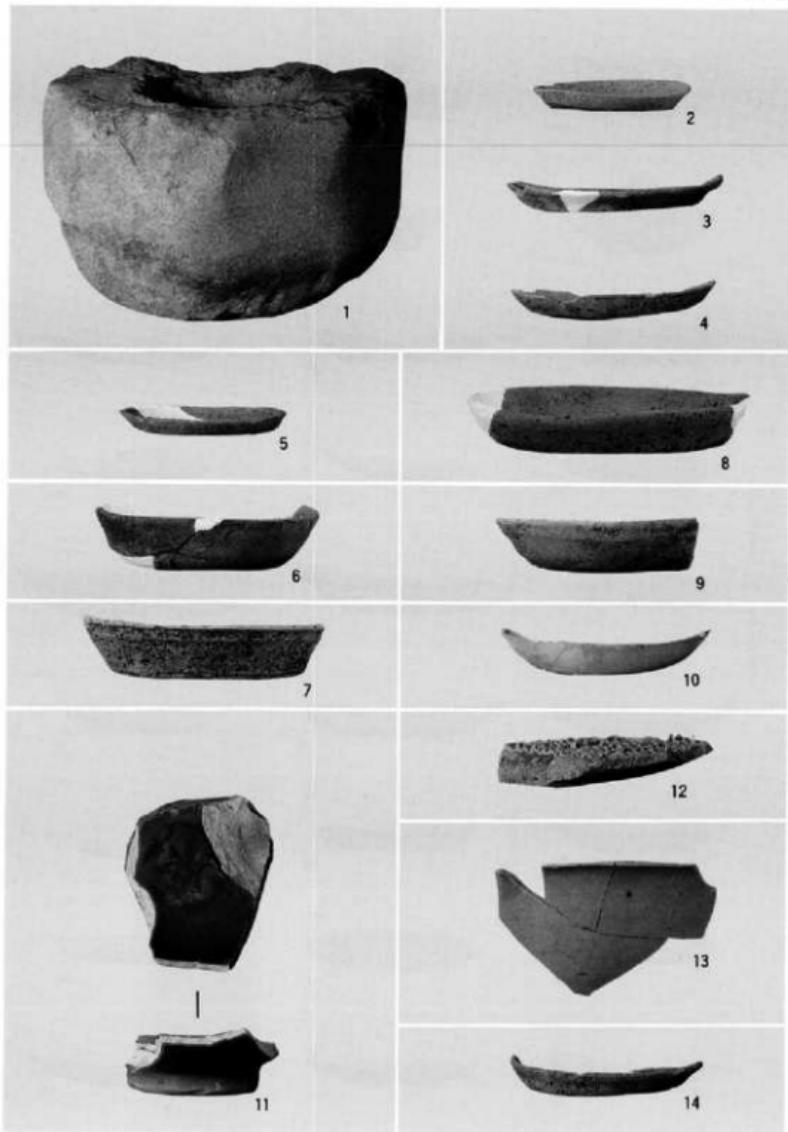




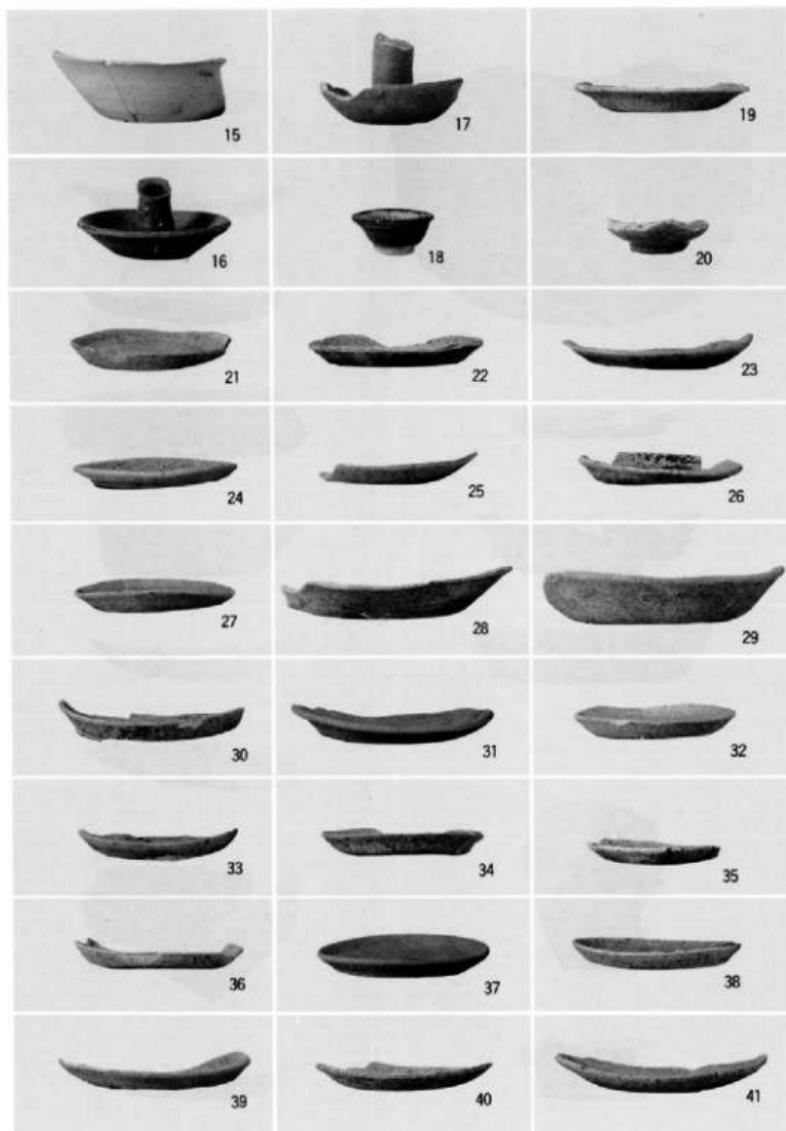
▲(1) SK25出土状況（北から）

▼(2) SK26出土状況（南から）

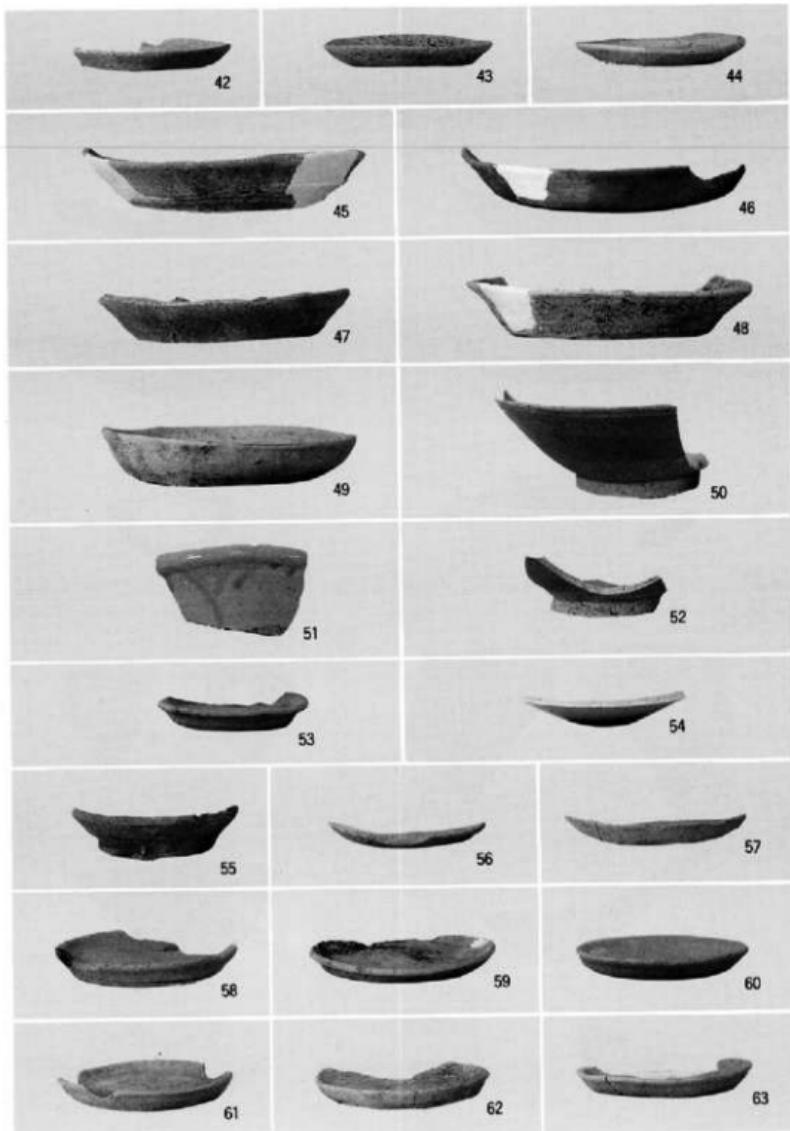




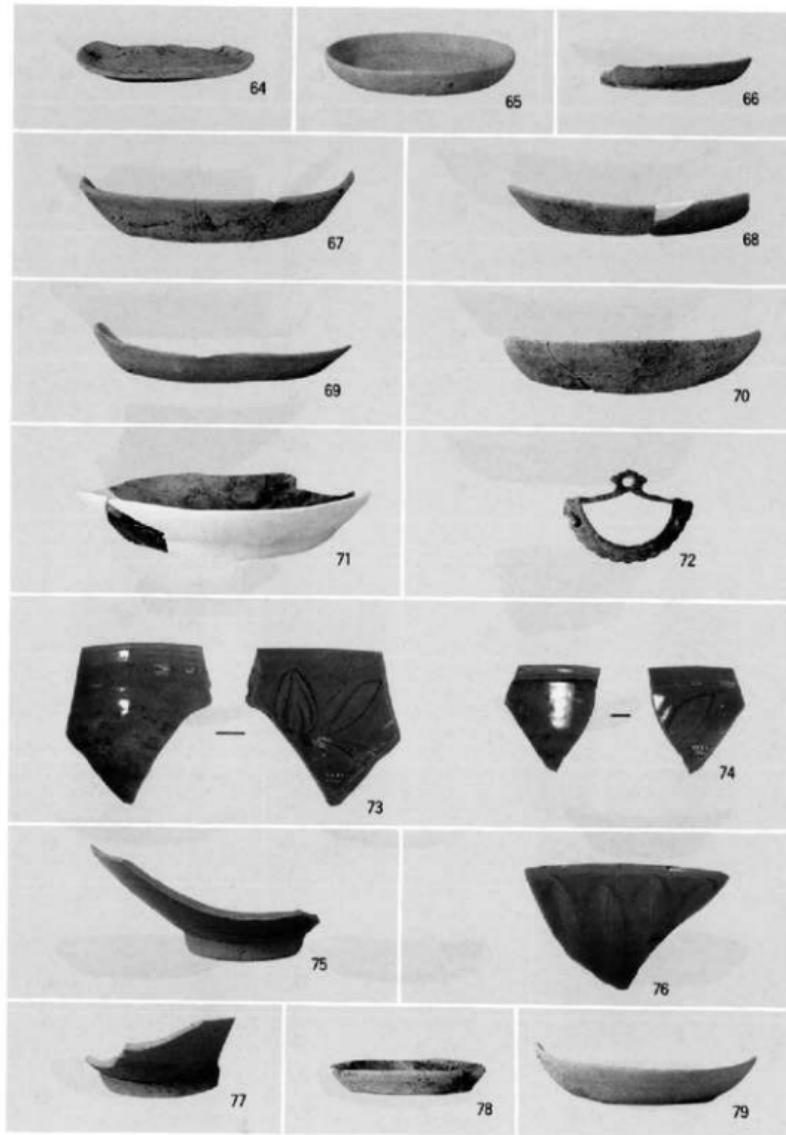
出土遺物(1) 1:SE09 2~12:SE22 16:SE24 17:SE27



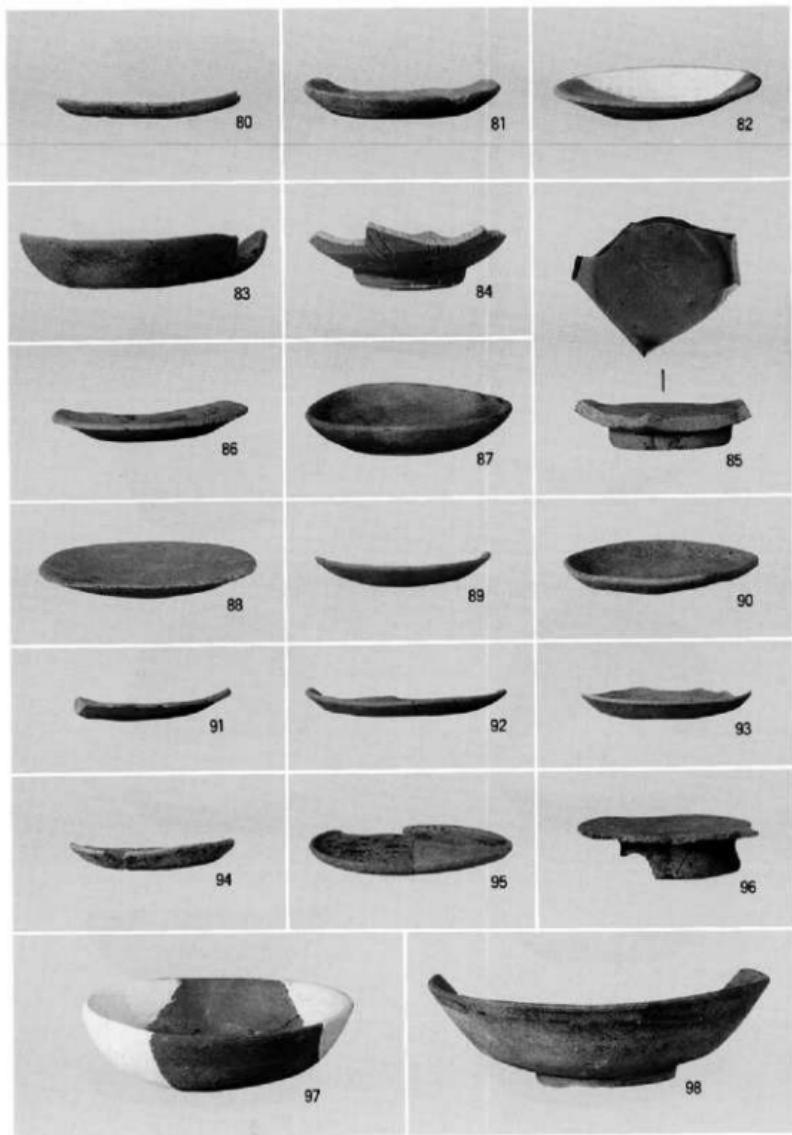
出土遺物(2) 15: SK01 16: SK03 17, 18, 20: SK07  
 19: SK04 21~29: SK10 30~41: SK12



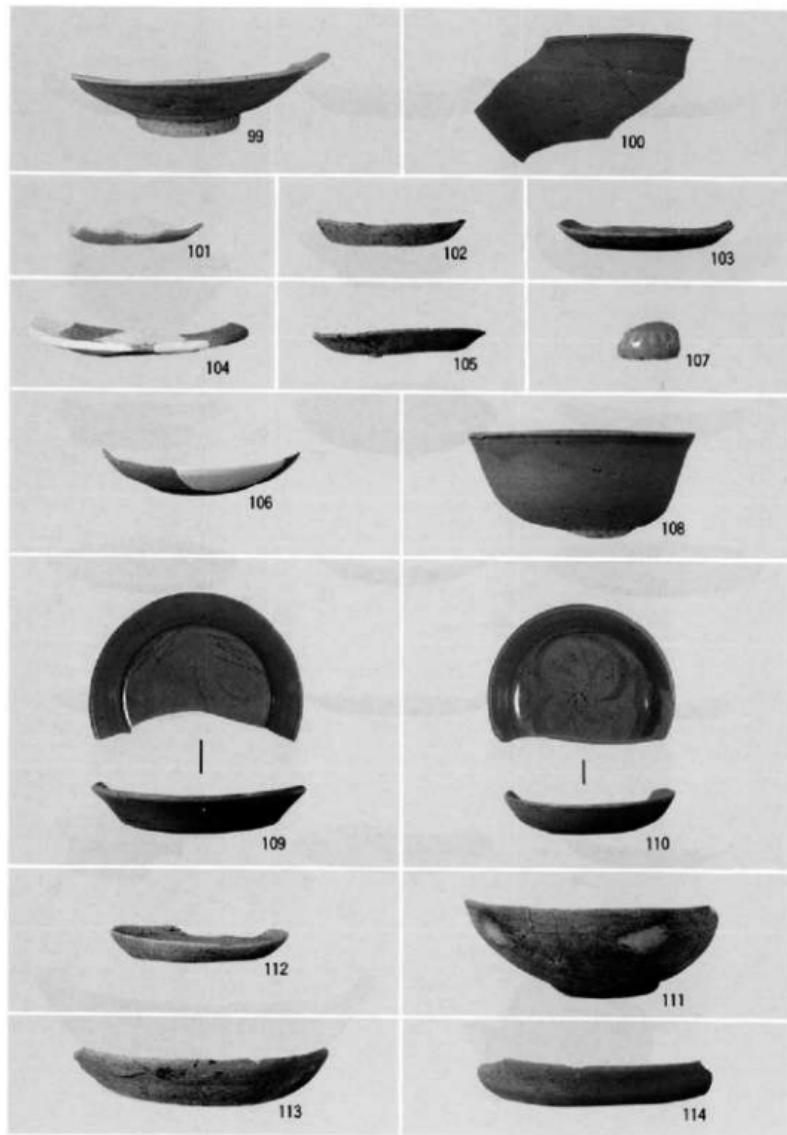
出土遺物(3) 42~52: SK12 53~56: SK18 57~63: SK25



出土遺物(4) 64~72 : SK25 73, 74 : SK26 75~77 : SK36  
78, 79 : SK37



出土遺物(5) 80: SP42 81,84: SP19 82: SP14 83: SP40 85: SP23  
86-98: 包含層



出土遺物(6) 99~101:包含層 102~111:練跡面 112~114:擾亂

## 箱崎遺跡2

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第262集

平成3（1991）年3月15日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神一丁目8-1  
(092)711-4667

印刷 同盟印刷株式会社  
福岡市博多区博多駅南六丁目6-1  
(092)431-4061

